

「首届洞天福地研究与保護国際學術検討会」 参加報告記

酒井規史

2019年6月22日から23日にかけて、中国・福建省の寧徳市で「首届洞天福地研究与保護国際學術検討会」が開催された。今回、筆者も参加する機会を得たので、その模様を紹介したい。

今回の会議は中国で初めて開催された、洞天福地を主題にすえた国際学会である。中国・台湾・日本・ドイツ・オランダから研究者が参加し、合計20以上の研究発表が行われた。日本からは専修大学の土屋昌明教授が組織する洞天研究会（科研費19H01194「道教の洞天思想における聖地と巡礼の調査研究およびその東アジア思想文化史への影響」）のメンバー総勢8名が参加し、会議の主要な一角を占めていた。なお、北京大学の張広保氏、華東師範大学の蔡林波氏も参加予定であったが、都合により欠席した。

会議を主催したのは清華大学国家遺産中心と清華大学建築設計研究院である。一見、道教研究とあまり関連がない部署のように思われるが、今回の学会は各地の洞天福地を保護・整備して世界遺産に申請するプロジェクトの一環でもある。学会のタイトルの中に「保護」とあるのは、そのことを示している。

また、今回の会場に寧徳市が選ばれたのは、郊外に第一小洞天である霍童山があるのも理由のひとつである。寧徳市蕉城区人民政府、寧徳市文化和旅游局も主催者として名を連ね、学会をバックアップしていた。

6月22日の開幕式では、福建省蕉城区共産党委員会書記の毛祚松氏、元国家文物局副局長・元中国文化遺産研究院院長である劉曙光氏、中国道教協会副会長の張金濤氏（会議は欠席。ビデオメッセージを上映）から祝辞が述べられた。今回の会議を支援する、寧徳市の地方政府、中国の文化遺産行政の関係者、道教界という三方面からの祝辞であった。なお、今回の会議には来賓として各地の洞天福地で活動している道士たちも招待されていた。

その後、短編映画『霍童』の上映が行われた。内容は第一小洞天の霍童山のほか、寧徳市周辺の文化遺産を広く紹介するものであった。15分ほどのショートフィルムではあったが、寧徳市が文化資源の開発に力を入れようとしていることが伝わってきた。

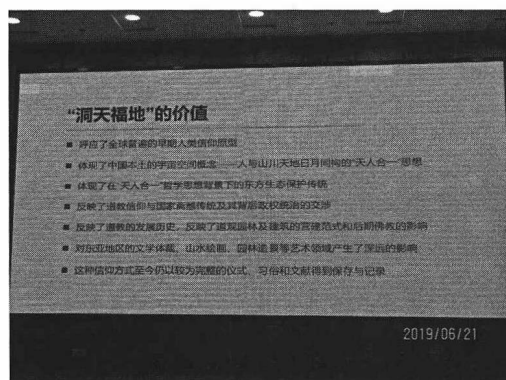
休憩をはさんで、三つの主題講演が行われた。はじめに、今回の会議の主催をした清華大学国家遺産中心の主任である呂舟氏が、「洞天福地価値闡釈と比較研究」と題して講演を行った。洞天福地が持つ文化的価値が述べられ、天人



会場の様子



中国道教協会副会長の張金清氏のビデオメッセージ



休憩をはさんで、三つの主題講演が行われた。清華大学国家遺産中心主任・呂舟氏「洞天福地価値闡釈と比較研究」



会場の様子

合一の觀念を體現していること、中国の代表的な宗教である道教にまつわる宗教的遺産であること、文学・絵画・園林といった文化・芸術への影響などが指摘された。さらに、各国にある世界遺産と比較した上で、人類と自然の相互作用で形成される“文化景観”として世界遺産に申請にできるのではないかという見通しが語られた。

続いて、寧徳市蕉城区政協副主席の林立志氏が「霍山論道」、寧徳市市委党校副研究員の謝丁寧氏が「霍童洞天文化溯源、内涵与伝承」という題目で講演を行った。いずれも寧徳市の現地の視点から、霍童山の沿革・概要と寧徳の宗教文化を述べるものであった。

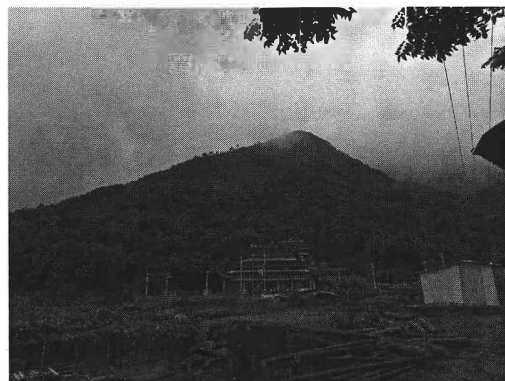
昼食のあと、午後はエクスカージョンが行われ、バスで第一小洞天である霍童山に向かった。洞窟そのものの見学はできなかったが、洞天に付設された道観である鶴林宮に参詣した。一行が到着すると盛大に爆竹が鳴らされ、その煙で視界が真っ白に染まるほどであった。鶴林宮では道士による儀礼を見学することができた。また、閩山派の法師による儀礼も道観の外で行われた。なお、



日本の発表者の様子



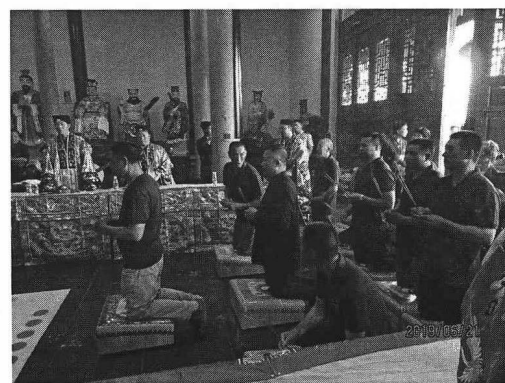
昼食のあと、午後はエクスカーションが行われた。
現在の鶴林宮からの眺望



鶴林宮と背後の峰の様子、もとの道観は峰の中腹
にあったが、清末の山崩れで消失した。この写真
でも山崩れの跡がうかがえる。道観には洞窟が
あったと伝承されている。



伝玄宗の石刻「霍童洞天」石刻



鶴林宮での儀礼の様子

筆者は中國大陸において道教と閩山派の儀礼が同時に行われるのを見たのは初めてであり、たいへん興味深かった。

また、鶴林宮には「霍童洞天」の四文字が篆書で刻された唐の玄宗時代の碑の一部が残されており、学会参加者の注目を集めていた。天宝六年（747）に霍童山の名を賜った時のものであるという。

会場のホテルに戻って夕食をとった後、22日の最後のセクション「洞天福地個案研究」が行われ、Volker Olles氏・筆者・石野一晴氏が登壇した。このセクションは各地の道教聖地と洞天福地の個別研究が主題であり、Olles氏は天師道の主簿山治（二十四治のひとつ）の沿革、筆者は宋代の茅山、石野氏は明清時代の羅浮山をテーマに報告を行った。題目は以下の通りである。

Volker Olles（中国名は欧福克。四川大学道教与宗教文化研究所）「從早期道教到三教併存的神聖空間：天師道二十四治—以蒲江主簿山治為例—」

酒井規史（慶應義塾大学）「宋代遊記中所見的天洞福地—以茅山為中心—」

石野一晴（慶應義塾大学）「明清時代羅浮山之隆盛与巡礼」

二日目の6月23日は終日会議が行われ、午後は二つの部会に分かれて研究発表と討議が行われた。

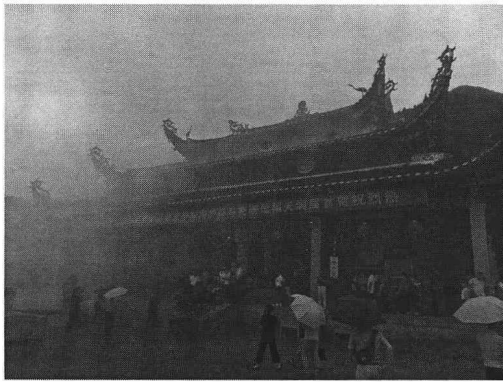
この日最初のセクションは「洞天福地原型与物質文化」と題され、李豊楸氏・Lannert Gesterkamp氏・莊蕙芷氏が発表を行った。李氏は明代の絵画に見える洞天福地と、当時の文人たちの旅行や宗教的観念との関連について述べた。続くGesterkamp氏は『山海経』、莊氏は漢代・晋代の墓室の構造から、宗教的な空間の観念がどのように形成されたのかを追ひ、洞天福地の観念が形成される過程を再検討するものであった。三氏ともに宗教的な空間のイメージを扱っているため、図表を多く用いた視覚にも訴えるプレゼンテーションなのが印象的であった。題目は以下の通り。

李豊楸（台湾政治大学、中央研究院）「遊觀洞天：故宮名画与明人遊道」

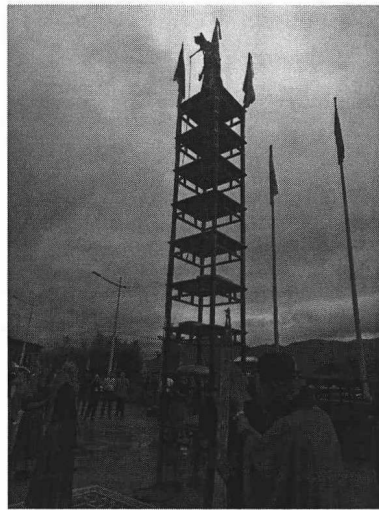
Lennert Gesterkamp（中国名は葛思康。アムステルダム大学）「『山海経』与洞天福地制度的原型」

莊蕙芷（江蘇師範大学）「虚実之間：石室、洞天与漢晋墓室空間」

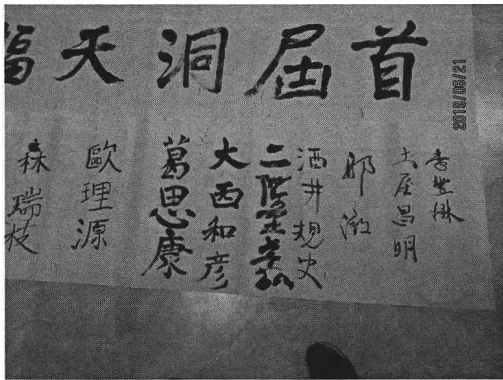
23日午前二つ目のセクションは「東亜洞天福地研究」と題され、土屋昌明氏・森瑞枝氏・大西和彦氏が発表を行った。このセクションは東アジア・東南アジアにおける洞天福地思想の展開をテーマにしている。土屋氏は玄宗には洞天福地の思想を海外に布教する意識があったことについて述べ、海外への伝播の見取り図を提供した。森氏は室町時代の『諏訪縁起』、大西氏はベトナムの抱福岩をテーマに、中国の周辺地域への洞天福地思想の伝播を明らかにした。中国



鶴林宮前での祭礼の様子。煙は爆竹によるもの



鶴林宮前での祭礼の様子



参加者による寄せ書き

の周辺諸国という外部の視線から洞天福地をみるという意味合いもあり、日本人研究者が貢献できるテーマであったといえよう。題目は以下の通り。

土屋昌明（専修大学）「唐玄宗の洞天思想と道教対外伝教」

森瑞枝（立教大学）「日本室町時代的救済観と洞天思想—關於『諏訪縁起』—」

大西和彦（ベトナム社会科学院）「越南北部東潮地域の抱福岩及其周辺」

23日の午後は二つの会場に分かれて、それぞれ二つのセッションに分けて研究発表と討議が行われた。以下、会場ごとに模様を述べていくことにする。なお、筆者は第二会場にいたので、第一会場の発表の内容については予稿集をもとに述べている。あらかじめご了承ください。

第一会場のはじめのセッションは「洞天福地歴史研究」と題され、魏斌氏・廣瀬直記氏・王崗氏が発表を行った。魏氏は洞天思想の形成期にみえる十か所の洞天について、廣瀬氏は二許の時代の茅山における洞天の位置づけについて発表した。王氏の発表は、洞天福地思想が定着した後である明代における茅山の宗師の系譜を考証したものであった。題目は以下の通り。

魏斌（武漢大学）「最初の十所洞天」

廣瀬直記（早稲田大学）「二許与洞天」

王崗（フロリダ大学）「明代茅山上清宗師的譜系」

第一会場ふたつめのセッションは「洞天福地与仙伝文学」という題目で、大形徹氏が『列仙伝』、二階堂義弘氏が明清時代の『歴代神仙通鑑』にみえる洞天福地について研究報告を行った。洞天福地思想の形成期の資料と、近世における展開・変貌を対照できる構成となっていた。題目は以下の通り。

大形徹（大阪府立大学）「從洞天福地看『列仙伝』的仙人与山」

二階堂義弘（関西大学）「『神仙通鑑』所見的明清期洞天福地」

第二会場のはじめのセッションは「洞天与儀式象征」と題され、陶金氏と湯沁嫻氏が発表を行った。陶氏は茅山における神仙の官僚組織と華陽洞天的構造との関連性について、湯氏は古代の遊戯である「六博棋」の盤面デザインの背後にある宇宙観について発表をした。いずれも宗教的な世界観に関する発表であった。題目は以下の通り。

陶金（清華大学建築設計研究院、茅山道教文化研究中心）「遊仙之場：作為過渡儀式空間的洞天」

湯沁嫻（南京芸術学院）「昇仙之路：從図解博局紋試探六博棋行棋路線」

第二会場のふたつめのセッションは「洞天福地与山水園林」という題目で、傅舒蘭氏・鞠熙氏が発表を行った。傅氏は朝鮮半島の園林の設計・意匠とそれに対する道教の潜在的な影響、鞠氏は四川省清平郷の自然環境と現地における神話・伝説の展開との関係について発表を行った。いずれも自然環境と洞天福地想の関係を考察する報告であった。題目は以下の通り。

傅舒蘭（浙江大学建築工程学院）「朝鮮園林中的“丹丘”」

鞠熙（北京師範大学）「峡口的宇宙—四川省清平郷の山水環境与口伝神話」

閉幕式では、まず李豊楸氏による講演が行われ、今回の会議の成果を総括するとともに、洞天福地の研究と保護を進めていくための提言がなされた（講演の日本語訳を付録として収録しているので、詳しい内容はそちらを参照されたい）。次に清華大学建築設計研究院の崔光海氏が「關於洞天福地的蕉城專家建議」を読み上げ、霍童山に対する保護を進めること、今後も洞天福地の学会を常態化し、洞天福地の研究を推進していくことなどを提言した。なお、この「建議」は文章化され、今回の参加者が署名した。最後に劉曙光氏が登壇し、洞天福地の研究と世界遺産への申請のふたつの方面について今後の発展を期待する旨が述べられ、会議の全日程が終了した。

以上に述べたように、二日間の会議ではさまざまな分野の専門家が洞天福地、もしくは宗教的な空間や世界観についての発表を行い、現段階における洞天福地に関するテーマは大体において網羅されていた。また、休憩時間や食事の際にも活発な意見交換が行われた。参加者が旧知の間柄である場合も多く、終始なごやかな雰囲気では会議は進行した。

今回の会議の最大の特徴は、道教の専門家だけではなく、考古学や建築学などの研究者も参加し、より広い視野で洞天福地や中国宗教の世界観をとらえようとする点であろう。人文系だけでなく理科系の領域も含む学際的な方向性は、今後開催されるであろう第二回以降の会議にも受け継がれていくはずである。

会場へ向かうバスの中で、2009年から洞天の現地調査を行っていた土屋氏と大形氏が、洞天の一つである天台山（赤城山）の調査の帰りに、洞天福地は世界文化遺産に申請すべきだと冗談を語り合ったという思い出を話しておられた。今や、それが実現する方向へと動き出したのである。現地調査と文献研究の対照研究、および東アジア全体の視野から捉え直すという洞天研究会のコンセプトが、洞天福地の学術研究、さらには洞天を世界文化遺産に推薦しようとする清華大学の着想にあたえた刺激は少なくないように窺えた。

今後、洞天福地を世界遺産に申請する動きに呼応して、中国大陆を中心に洞天福地の研究がいっそう盛んになると思われる。今回の会議は現段階における洞天福地研究の最前線をしめすだけでなく、今後の研究の起点となる記念すべきものとしても位置づけられるであろう。